

話題提示に見られる無助詞文の条件

—ニュース見出しを中心として—

黒崎 佐仁子

要 旨

本稿は、日本語教育では学習項目外となっているが、実際には使用されている日本語の特徴の一つである無助詞文について論じたものである。無助詞文の研究は、近年盛んに行われているが、研究者に一致した結論が出ているわけではない。本稿は新たな試みとして、ニュースの見出しに目を向けた。ニュースの見出しには、話しことばの無助詞文と非常によく似た無助詞文が使用されている。そこで、見出しに使用されている無助詞文を分析し、その結果を話しことばの無助詞文に適用、そこから、話しことばに見られる無助詞文の出現条件、機能、表現効果について次のような結論を出した。無助詞は、読み手または書き手に周知であると見なされる語句につく。無助詞の機能は、ハの主題化と類似しているが、ハとは異なり、無助詞は読み手または書き手の予測や期待が排除されている。また、無助詞は、認知の順番を示し、それによって読み手や聞き手の興味を話題に向けさせる。

キーワード

無助詞・助詞の省略・主題化・話題・新規導入

1. はじめに

本稿は、日本語教育への応用を目的として、自然な日本語の特徴の一つとも言える無助詞文の分析を試みるものである。無助詞文の研究は、これまで話しことばのみが研究対象とされてきた。そこで本研究では、新たな研究方法としてニュースの見出しに目を向け、ニュース見出しに見られる無助詞文を分析し、その結果を話しことばの無助詞文に適用し、「出現条件」「機能」「表現効果」を導き出すことにした。

2. 先行研究

係助詞「ハ」、格助詞「ガ」の使い分けをはじめ、助詞に関する研究は、古くから現在に至るまで非常に活発に行われている。(三上(1953)、佐治(1984)、野田(1996)など)しかし、実際の日本語には、名詞の後に助詞のない文も使用されている。本稿では、この

名詞の後の助詞のない部分を便宜上「 ϕ 」と印すことにする。

(1) [二人はビール試飲をすすめるアルバイトについて話している。]

1: あれ ϕ あの、確率でどの程度の人に声をかけたら、あのーどの程度の人が、あのー飲んでくれますか? とりあえず。

2: あー、あのー、ええ、そうですね、けっこう私 ϕ あのー売るのは、得意らしくて、自分ではわからないんですけど、けっこう3人に一人ぐらいは買って行って。

(会話コーパス)

「助詞がない」ことを助詞の省略と見るか、助詞と同様の機能を持つ「無助詞」と見るかは、研究者によって意見が分かれているが、無助詞の存在は松下(1928)で既に記述されている。

題目には分説合説単説の三種類が有る。分ける意味も合わせる意味もない題目は単説である。

(P338 L.8)

私が幹事です。	平説			
{	私は幹事です。	分説	}	題目
	私も幹事です。	合説		
	私、幹事です。	単説		

(P338 L.13 ~ L.16)

省略という立場を取る研究には久野(1973)、筒井(1984)、甲斐(1991)、藤原(1992)、Lee, Kiri(2002)などがある。これに対し、無助詞の存在を認め、分類を行っているのが尾上(1987)、尾上(1996)であり、機能について述べているのが長谷川(1993)、丸山(1996)、加藤(1997)、Lee, Duck-Young(2002)である。尾上(1987)は、無助詞と助詞の省略を分けることに関し、次のように述べている。

「ナイフある?」というような質問文においては、主語に助詞「は」も「が」も使いにくい。これは、口頭表現において助詞が省略され得るというだけでなく、いかに丁寧に言っても助詞を入れにくい、入れれば普通の質問とはちがった特別な意味が出てしまう、という性質の問題である。

(P48 L.3 ~ L.7)

大谷(1995)も省略と無助詞の両方の存在を認め、情報の新旧および共有知識の状態によって無助詞の出現条件を明らかにしようとしている。丹羽(1989)は、次のように「無助詞格」を定義し、既知性と語順の関係からその出現条件を提示している。

「無助詞格」というのは、(省略)項となる名詞と述語の間に助詞を持たない形に対する名称である。(省略)この「無助詞格」を例文のように「 ϕ 」と表記する(「ゼロ」と読む)ことにする。

(P38 上 L.2 ~ L.11)

「が」も用いられず、そうかといって「は」もやや不的確な例があるからである。(省略)「 ϕ 」は「は」の省略だと考えず、「 ϕ 」自体が主題表示の機能を持つと考えた方がよい。

(P.39 下 L.3 ~ L.24)

以上の主な要点をまとめると次のようになる。

- 1 「名詞 ϕ 」は、それが焦点の位置にあるのでなければ、その名詞の既知性が高いほど、また文頭に近い位置にあるほど主題性が高い。(省略)
- 3 「名詞 ϕ 」の主題性の高低に関わる、名詞の既知性の高さとは、当該名詞が談話に登場しているか、発話時の状況・文脈から登場が予測しやすいかということである。(省略)

(P54 下 L5 ~ L15)

本研究では、「 ϕ 」と「ハ」「ガ」の比較を行うため、「無助詞格」ではなく「無助詞」という名称を用いるが、これは「項となる名詞と述語の間に助詞を持たない形に対する名称」である。また、「 ϕ 」を含む一文を「無助詞文」と呼ぶことにする。

見出しに注目した先行研究には、野口（2002）があり、日本語教育の立場から見出しの文法を整理し、見出し解読への手引きを提出している。野口（2002）は、見出しの省略方法を「①表現の工夫による省略」と「②記号による省略」に大別し、前者には「助詞の省略、名詞止め、助詞止め、略語・略称」があると指摘している。（P.98 L.1 ~ L.14）見出しの助詞の省略に目を向けているのは、水内（2001）である。水内（2001）は、記者の立場から研究を行い、見出しにおける助詞の省略は字数制限によるものとし、助詞の使用頻度や助詞の省略頻度について調査している。

3. 見出しに見られる無助詞文

無助詞は、話しことば特有の現象であるとされ、先行研究は話しことばを中心に行われている。しかし、会話に見られる無助詞文と非常によく似た「助詞のない文」を、新聞や雑誌の見出しに見ることができる。本稿では、新たな試みとして、インターネットのニュース欄に注目し、新聞社のホームページ及び検索サイトに載せられていたニュースの見出しを分析し、その表現効果や出現条件を明らかにする。そして、さらにその結果を話しことばの分析に応用していく。

例文採集は、2007年4月9日から2007年4月15日に行った。（ ）内は、本稿での出典表示である。

『Asahi.com』	朝日新聞	http://www.yomiuri.co.jp/	（朝日）
『共同通信社』		http://kyodo.co.jp/	（共同）
『MSN Japan』	毎日新聞	http://jp.msn.com/	（毎日）
『NIKKEI NET』	日本経済新聞	http://www.nikkei.co.jp/	（日経）
『SankeiWEB』	産経新聞	http://www.sankei.co.jp/	（産経）
『Yahoo! JAPAN』		http://www.yahoo.co.jp/	（Yahoo）
『YOMIURI』	読売新聞	http://www.yomiuri.co.jp/	（読売）

見出しとは、「新聞・雑誌などの記事の標題（広辞苑）」のことである。ニュース欄には字数制限があり、そのために助詞を省いている場合もあるだろう。しかし、(2)から(5)の実例では、読点または空白が用いられており、助詞ではなく無助詞が意図的に選択されていることが分かる。

- | | |
|-------------------------------|---------|
| (2) 温首相 衆院で日本の姿勢評価 | (Yahoo) |
| (3) 中国首相、日中の信頼増進訴え・国会で演説 | (日経) |
| (4) 歴史問題、実際の行動で態度表明を…温首相が国会演説 | (読売) |
| (5) 温家宝首相が国会演説、歴史認識問題で苦言 | (産経) |

野口（2002）は、助詞の省略であるという立場ではあるが、見出しの無助詞には「①読点（.）で代用する。②空白（半角分）で代用する。③主語と述語を直接つなげる。」の3

種があると述べている。(P.98 L.23 ~ P.99 L.6)

本稿では、この見出しの文頭に見られる無助詞化は、その前の語または句の主題化であると考えられる。野口(2002)は、以下のように述べ、倒置された述部が読者と見出し作成者の関心事であるとしている。しかし、これは倒置された述部に限られたものではなく、無助詞になっている文頭の名詞にも言えることである。

倒置構造では、重点のある語句が文頭に置かれる。述語が見出しの初めに、目的語や主語が末尾にくる。(省略)

(21) 広がるか ホームスクール (日経 2000/8/12)

(22) どうする? プルトニウム (朝日 2002/2/22)

(省略) これは、最初の読者である見出し作成者にとっての関心事は、倒置された述部にあり、主語・目的語が、読者と作成者に共通の既知情報として扱われているからであろう。

(P.104 L.3 ~ P.14)

本稿では、無助詞の機能を主題化ではなく話題提示と呼んで論を進めることにする。これは、提題助詞「ハ」の機能との混同を避けるためである。

(2) (3) は「温首相」「中国首相」の後に助詞を意図的に入れていない。これは、見出し、さらにニュース全体の話題として「温首相」「中国首相」を提示しているからである。(4) (5) にも「温家宝首相」「温首相」という語は出てきているが、その後には格助詞「が」が付いている。これは、話題が「温首相」ではなく、「歴史問題」であったり、(5) のように提示されていなかったりするからである。

ニュース見出しを、実例の文頭に注目して分類すると、次の4つに分けることができる。

A) 個人・団体の名称によって特定の個人または団体が話題となっているもの

(6) 松坂、MLB 屈指の打線と対決 (yahoo)

(7) モスバーガー、味重視で牛豚ミンチ復活 (朝日)

B) 出来事または出来事の中心事物が話題となっているもの

(8) イージス艦事件、海自幹部ら一斉聴取…流出源の特定急ぐ (読売)

(9) 薄型テレビ、42型以上で競争激しく・松下やシャープなど (日経)

C) 読者の目を引くためのことばが文頭に來ているもの

(10) おきて破り? 44年ぶり村長選 (yahoo)

(11) 氷点下10度、小屋まで決死の道作り…北ア・ヘリ墜落事故 (毎日)

D) 全体が文または語句の羅列で話題が明示されていないもの

(12) 宇宙からマラソン参加し完走 (Yahoo)

(13) 相談窓口設け、転院先探しを 療養病床転換で基本指針案 (共同)

この4分類のうちA、Bは無助詞によって話題が提示されている見出しであり、C、Dは話題が提示されていない見出しである。

本稿は見出しの話題と話しことばの無助詞を関連させる第一稿であるため、特にガ格を中心に論を進め、「ハ」「ガ」「φ」の表現効果の違いに注目する。野田(1996)はガを用いた構文について次のように述べている。

「富士山が見えるよ」構文は、できごとをできごととして、そのまま述べる働きをする。」

(P.90 ~ P.91 L.27 ~ L.1)

- (14) ヤッターマンが実写版で復活 (Yahoo)
- (15) 全日空グループ労組がスト突入、国内線 136 便欠航へ (読売)
- (14) (15) では、「このようなことが起きた」というできごと全体がニュース見出しとなっている。これに対し、無助詞を用いた見出しでは、(16) のように無助詞の前の語が話題であり、「話題に何が起きたか」がニュース見出しになっている。
- (16) 松坂、3 失点で初黒星 イチローは封じる (朝日)
- 「ハ」を用いた文の見出しはどうであろうか。
- (17) 開業医は日曜や夜も診療を 厚労省、今後の医療政策提言 (共同)
- (18) 「白樺」は共同開発対象外 中国、別のガス田生産開始 (産経)
- (17) は「「開業医は日曜や夜も診療を」と厚労省が提言した」と言い換えられるように、引用の一部であり、見出しの話題というよりは、厚労省の決定の主題であると言えるだろう。つまり、上記のような「ハ」の付いた語句は見出しの話題ではない。また、(18) は「白樺は共同開発の対象外であるが、別のガス田生産は開始した。」のように、「白樺」と「別のガス田」が対比されている。もちろん、(19) のように対比であることが分かりにくい例もある。
- (19) ゴールデンウィークは平均 7.2 日 5 年ぶり 1 週間超え (毎日)
- しかし、(20) で「今年のゴールデンウィーク」と「例年のゴールデンウィーク」が対比されているように、明示はされていないが (19) も今年のゴールデンウィークと例年のゴールデンウィークが対比されている。
- (20) 今年のゴールデンウィーク (GW) の連休は平均 7.2 日で、5 年ぶりの 1 週間超え (朝日)
- また、実例はほとんどなかったが、「措定」であるために、「ハ」を用いている文も見つけることができた。これに関しては、次章で述べることにする。

4. 野田 (1996) の 5 つの原理

野田 (1996) は先行研究を参考に「ハ」と「ガ」の使い分けを「これまでに提案された 5 つの原理」にまとめている。(P.108 L.21 ~ P.109 L.3) ここでは、ニュース見出しの無助詞をこの原理に当てはめ、無助詞と「ハ」「ガ」の違いを明らかにする。

- 1) 新情報と旧情報の原理——新情報には「が」、旧情報には「は」
- 2) 現象文と判断文の原理——現象文には「が」、判断文には「は」
- 3) 文と節の原理——文末までかかるときは「は」、節の中は「が」
- 4) 対比と排他 of 原理——対比のときは「は」、排他 of のときは「が」
- 5) 措定と指定の原理——措定には「は」、指定には「は」か「が」

4-1 新情報には「が」、旧情報には「は」

- (21) 松坂、3 失点で初黒星 イチローは封じる (Asahi)
- 「ミスタードーナツ」という話題は、新聞社側 (書き手) と、ニュースの読者 (読み手) のやりとりから出てきたものではなく、書き手から予告なく提示されたものである。その

ため、旧情報ではなく新情報である。しかし、話題となっている語句は、固有名詞や一般に周知されている語彙であり、新情報でありながらも、読み手には詳しい説明がなくとも、すぐにその語句が何を表しているかが理解できる。言い換えると、読み手が一目で何を表しているのか分からない語句は話題とはならないのである。

(22) <邦人誘拐>有力情報に賞金 120 万円 パラグアイ国家警察 (Yahoo 4/10 01:11)

(23) <パラグアイ日本人誘拐>山口佐和子さんを解放 (Yahoo 4/10 22:02)

(24) 山口さん無事解放=パラグアイ邦人誘拐事件 (Yahoo 4/11 01:01)

(25) 解放の山口さん、防犯カメラに=犯人情報なし-パラグアイ邦人誘拐
(Yahoo 4/12 11:00)

(22) は、ニュースの第一報である。話題は「邦人誘拐」であり、読み手にはどんな出来事が起こったのか一目で理解できる。このニュースが広く伝わり、事件の詳細が社会的に周知されたと判断されると、(24) (25) のように固有名詞「山口さん」が話題となる資格を得る。つまり、読み手に理解できると判断される前に、「山口さん」が話題の「山口さん誘拐 有力情報に賞金 120 万円」という見出しが出ることはない。つまり、見出しの話題は新情報ではあるものの、旧情報と同様、説明がなくとも読み手には何を示しているかが分かるという特徴があるのである。

4-2 現象文には「が」、判断文には「は」

ニュースは論評等を除けば事実を伝えるものであり、書き手による判断は極力避けられているか、読み手に気づかれなくなっているはずである。そのため、加工を加えずに伝えていると言う点では、見出しも現象文の一種である。しかしながら、「ガ」を用いた文が、出来事全体を伝えているのに対し、無助詞文は話題を取りあげ、その話題に関して述べている。この話題の提示は、判断文の特徴であり、現象文の特徴ではない。そのように考えると、無助詞文は現象文でありながら判断文の形式を取っていると言うことができる。これは、大谷 (1995) が指摘する無助詞文の現象文からの逸脱と共通する特徴である。

事態の捉え方は、現象を認知し判断の加工を加えずにそのまま判断しており現象文的だが、情報の流れは、その主語の名詞が文脈上主題になっていて判断文的である。この矛盾により「ハもガも使えない文」となるのである。(P.289 L.18 ~ L.20)

このことから、話しことばの無助詞と見出しの無助詞には共通点があることが分かる。

4-3 文末までかかるときは「は」、節の中は「が」

見出しはほとんどが単文である。また、話題とは見出しまたはニュースの中の最も重要な語句、またはニュースを理解するために必要な語句であり、ニュース全体に関するものである。そのように考えると、見出しの話題は文や節を越えた、より大きな範囲にまで関係していると言えるだろう。

4-4 対比のときは「は」、排他のときは「が」

対比には、先に述べたように「ハ」が用いられるが、排他はどうだろうか。

(26) 宅八郎氏が渋谷区長選に出馬 (Yahoo)

野田 (1996) は、「排他を表す「が」の周辺」として、「意外性や驚きのニュアンスをとめないやすい (P236 L.16 ~ 1.17)」という「ガ」を取り上げている。(26) も「あの」を付けると分かりやすいが、「あの宅八郎氏が出馬」のように意外性や驚きのニュアンスが含まれている。このように排他の表現効果を用いる時には「ガ」が用いられるのである。

この対比、排他という表現効果は、「ハ」または「ガ」があってこそ生み出されるものであり、無助詞では、このような表現効果は出ない。言い換えれば、対比、排他の意味を出さないために無助詞が選択されているのである。

4-5 措定には「は」、指定には「は」か「が」

措定と指定の原理は三上 (1953) が初めに提案したものである。

述語が主格名詞の性質を表す「措定」のときには「は」だけが使われ、主格名詞と述語名詞が同じものであることを表す「指定」のときには「は」か「が」が使われるという原理である。 (P.111 L.24 ~ P.112 L.1)

(27) (28) は「ガ」が可能であるため、措定とは言えないが、三上 (1953) の措定文「いなごは害虫です。」が「害虫がいなごです。」とならず、指定「君の帽子はどれです？」が「どれが君の帽子です？」となることから、措定、指定を導き出すとすると、指定でもないことになる。

(27) 松坂、7回3失点で負け投手 (Yahoo)

松坂 (ハ / ガ / φ) 7回3失点で負け投手
3失点で負け投手 (*ハ / *ガ / φ) 松坂

(28) 宮里藍、イーブンバーで42位…米女子ゴルフ3日目 (読売)

宮里藍 (ハ / ガ / φ) イーブンバーで42位
イーブンバーで42位 (*ハ / *ガ / φ) 宮里藍

しかし、明らかに指定文である場合「ハ」が用いられる。

(29) 容疑者は寮の韓国人学生 ノート残す 米大学の銃乱射 (産経)

容疑者 (ハ / *ガ / φ) 寮の韓国人学生
寮の韓国人学生 (*ハ / ガ / φ) 容疑者

以上をまとめると、野田 (1996) の提示する5つの原理は無助詞の話題提示には適用できず、さらに「ハ」「ガ」が表す対比や排他のような表現効果も無助詞にはないことになる。つまり、無助詞がどの助詞の省略かという議論は成り立たず、無助詞独自の出現条件を考えていかなければならないのである。

5. 見出しの話題となる条件

見出しの話題について述べる前に、無助詞の出現条件について考えていきたい。Lee, Kiri (2002) は話しことばの無助詞に関して次のように述べている。

When the information status of the subject NP-ga is:

- a) Inactive (new), no element can be deleted.
- b) Semiactive (accessible), ga deletion is possible.
- c) Predictable therefore Active (given), subject NP deletion is possible.

(P699 L.28 ~ L.31)

A referent may become 'Semiactive' in the speaker's consciousness when a referent is associated with a nonlinguistic occurrence/event/state/entity which the speaker can be aware of, and which, for that reason, has been peripherally active, even though not directly focused on.

(P708 L.16 ~ L.19)

c) に関しては本稿の分析対象ではないため、稿を改めて論じることにするが、これは、大谷 (1995) と共通する説だろう。

主語となる要素が、話し手・聞き手間における固有の先行文脈によって共有知識になっており、しかも聞き手の頭の中である程度活性化されている場合、その要素に関する事態を描写して聞き手に提示しようとする、「ハもガも使えない文」になる。(P.293 L.22 ~ L.26)

これらの説は、実例からも分かるように見出しの無助詞にも当てはまる。

(22) <邦人誘拐>有力情報に賞金 120 万円 パラグアイ国家警察 (Yahoo 4/10 01:11)

(24) 山口さん無事解放=パラグアイ邦人誘拐事件 (Yahoo 4/11 01:01)

(22) の「邦人誘拐」は、何について言い表しているのか、いわゆる常識とされる語彙力さえあれば理解でき、読み手は一目でその知識が活性化される。そのような語彙は、ニュースの第一報から見出しの話題となることができる。また、事件が広く伝わり、詳細が一般に浸透したと判断されると、「山口さん」のように常識とは言えない語彙も、ニュースの社会的周知度から一目で活性化が可能だと判断され、話題として取り上げられるようになる。つまり、無助詞によって話題となっている語彙は、読み手にとって一目で何を示しているかが分からなければならないのである。

6. 「ハ」による主題化と「φ」による話題化

提題助詞「ハ」による主題化と、見出しに見られる無助詞の話題化の違いは何だろうか。「ハ」の主題化について、野田 (1996) は、次のように述べている。

「ハ」は、聞き手にとって関心がありそうな名詞の後について、その名詞がその文の「主題」であることを示す働きをするのだと、とりあえず、いうことができる。(P.3 L.16 ~ L.18)

この「聞き手にとって関心がありそうな名詞」かどうかという判断が行われるためには、前もって話し手と聞き手の間で何かしら情報、状況、会話等のやりとりがなければならぬ。この前もって行われるやりとりのために、「ハ」は旧情報に付くと言われるのである。これに対し、無助詞はどうだろうか。「ハ」と見出しの無助詞は、主題を取り上げる語句に付く。しかし、見出しの話題は、書き手と読み手に前もってやりとりがあるわけではなく、情報としては新情報である。つまり、「ハ」が「聞き手にとって関心がありそうな名詞」に付くのに対し、無助詞は「書き手(話し手)が書きたい(話したい)と思っている新規の話題」に付くのである。

7. 話しことばに見られる無助詞文の分析

次に話しことばの無助詞文について考えて行きたい。ここでは、テレビドラマと映画の会話を筆者が書き起こしたものを使用する。()内は出典表示である。また、()表示のないものは、筆者の作例である。

(30) [訓練所に強制収容された洋二が部屋の高橋と初めて顔を合わせる。]

洋二：なんだよ、これはよ。どうなってんだ、ここは。

高橋：初めまして。私(φ/?ハ/*ガ)、高橋です。(オトナ)

この会話では、洋二の注意は訓練所に収容されたということにあり、高橋の自己紹介は突然のものである。そのために、「私」は無助詞で話題として取り上げられている。もちろん、この場合に「ハ」が不自然だと言いつけるわけではないが、ここで「ハ」が用いられると、洋二が高橋の自己紹介を暗黙のうちに期待している、または予期していると捉えられるだろう。

例えば、新入生が一つの教室に集まって、自己紹介をし合う際には、「私φ高橋です」は不自然となる。これに対し、「ハ」は自然となるが、これは対比だからだとも言える。しかしながら、「高橋です」から自己紹介を始めても、決して不自然でないことを考えると、「私φ高橋です」が不自然となるのは、自己紹介が単に「話し手の話したいこと」ではなく「聞き手にとって関心がありそうなこと」になっているからである。

(31) [新入生歓迎会の自己紹介]

高橋：私(*φ/ハ/*ガ)高橋です。/高橋です。

また、「高橋」を探している人に対し、「自分が高橋である」と伝える場合にはどうだろうか。

(32) [佐藤は高橋を探している。]

佐藤：すみません。高橋さんはいらっしゃいますか？

高橋：はい、私(φ/*ハ/ガ)高橋です。

私です。/?高橋です。/高橋は私です。

「高橋」が主題になっているため、「高橋ハ私です。」と主題が明示されていない「私です。」は自然な返答である。また、「高橋ハ私です」は指定であり、述語が主題にもなるため、「私ガ高橋です」も自然となる。これに対し、「私ハ高橋です」という返答は、「私」が主題になっており、佐藤が「私」について聞きたいと思っていると判断されてしまう。もしもこれが「私ハ田中です。」であったならば、佐藤が田中に対し高橋という人物であるかどうかを確認し、田中が「私」を主題として返答したという自然な会話となる。では、なぜ「私φ高橋です」が自然となるのか。これは、無助詞には新しい話題を提示するという働きがあるからである。佐藤は、「私」が高橋であるという期待や予想はしていない。そのため、高橋は「私」を新たに話題として取り上げたのである。では、名詞文以外ではどうだろうか。

(33) [会議で係りを決めている。]

高橋：私φやります。/私?ハやります。/私?ガやります。/やります。

「ハ」が用いられるのは、「他の人は知りませんが」という対比の意味を生じさせる場合

や、他の人たちが「高橋さんはどうなんだろう。」と高橋の意見を聞きたいと望んでいることが明らかな場合である。また、「私がやります。」と発言した場合は、「ガ」に総記の意味が生じ、「誰もやりたがらないから、私がやる」または「他人に有無を言わせないほど非常に積極的な立候補である」と理解される。これは、「ガ」は現象文で用いられることに関係がある。つまり、総記の意味を生じさせない「私がやります。」は、既に決まっている事実を表現するものであり、立候補のように他者からの賛同を得たうえで決定されるべき場合には不自然となる。そのため、立候補のような場面では、「私」を新規の話題として取り上げる無助詞文がもっとも自然となる。

(34) [雨宿りをしている有一と千春の会話。二人はこれが初対面である。]

有一1: まいったな。天気予報じゃ降るって言ってなかったのに? ね。

千春1: 言っていましたよ。

有一2: え?

千春2: 雨だって。

有一3: じゃ、なんで?

千春3: 傘φ、電車の中に置いてきちゃったんです。

有一4: 止みませんね。あ、この映画φ、前から気になってたんだよな。

千春4: 私も。

(結婚)

有一4で「この映画」が無助詞になっているのは、雨や傘とはまったく関係のない「この映画」を話題として提出するためである。千春3で「傘」が無助詞なのは、文脈や状況から暗示的に話題になってはいるものの、ことばとしては「傘」が話題であると明示されていないため、「傘」をはっきりと話題化するために無助詞が選択されたのだと考えられる。有一3が「なんで傘を持って来なかったの?」と「傘」を主題にして質問をしていたら、千春の返答は「(傘は) 電車の中に置いてきちゃったんです。」になっていただろう。また、「傘ヲ電車の中に置いてきちゃったんです。」という返答は、有一3の「じゃ、なんで?」が「なんで傘を持って来なかったの?」ではなく、「なんで支度をして来なかったの?」と千春に理解された場合に起きる。

(35) 1a: あの、先程静岡っておっしゃったんですけど静岡と言えば、サッカー。

2: あ、はい。

1b: あはは、で、あの一やはりご出身の高校もサッカーφ強かったですか?

(会話コーパス)

(35) は、実際の話しことばの例である。「静岡と言えば、サッカー」という1aの発話があるため、次の1b「サッカーφ強かったですか?」のサッカーは、2にとって活性化された情報であり、さらにサッカーは一般的な語彙であるためそれが何であるかも2には理解されている。この会話では、1bで「サッカー」を無助詞にすることで、話題を「静岡」から「サッカー」に移している、つまり「サッカー」を新規の話題として立てているのである。

以上述べてきたように、話しことばにおける無助詞の機能は新規話題の導入であり、この新規話題は聞き手の予想や期待に関係しない点が「ハ」とは異なっている。

8. 無助詞の表現効果

本稿では無助詞は、話題提示の働きをすると論じているのだが、では無助詞を用いて話題化することで得られる表現効果は何だろうか。それは、認識の順番を決め、話題に対する興味を引き出す効果である。ニュースの見出しに見られる無助詞話題は、読み手にまず話題が何であるかを認識させ、興味を引き付けてから、次にその詳しい内容を提示している。なぜなら、読み手にとって「書き手が何を中心に伝えようとしているか」が理解しやすくなるからである。同様に、話しことばの無助詞もどの順番で何を先に認識したか、または認識してほしいかを伝えている。

(36) [居酒屋の張り紙] ビール、あります。

(36) は、客にまず「ビール」を頭の中で思い描かせ、次に「あります」という情報を伝えている。つまり、「ビール」に対する興味を引き出すために、「ビールがあります」ではなく、「ビールφあります」という無助詞文が用いられているのである。(36) と同じように、(37) (38) は、「あの時計が止まってる」「雨が降ってきた」のように「目で見えた現象や状況自体」を表現しているのではなく、まず「あの時計」「雨」を認識し、次に「止まってる」「降ってきた」ことを認識したという認識順をそのまま表現しているのである。

(37) あ、あの時計、止まってる。

(38) あ、雨、降ってきた。

(37) (38) は、自分の認識を述べている文があるが、(39) は話し手が聞き手に対し認識を促している文である。

(39) [洋二と高橋は強制訓練所にいる。]

高橋1：お疲れ様です。

洋二1：おつかれっす。

高橋2：(マニュアルを見せながら) 私φ、いつもここでつまずいてしまって、どうしても注意できないんですよ。

洋二2：(カレンダーの印を指差して) これφ何ですか。

高橋3：ああ、娘の誕生日なんです。

洋二3：娘さんφいるんだ。

高橋4：ええ。かわいいでしょ。その日までには、なんとか卒業したかったんですけど。もう無理です。 (オトナ)

高橋2「私φいつもここでつまずいてしまって」は、「ガ」が不自然なのはもちろんであるが、「ハ」も対比の意味が生じてしまうため使うことができない。つまり、高橋は「私」を話題にしているのであり、「私以外」については言及していないことを無助詞が表現している。「これφ何ですか?」は、「これハ何ですか?」でも、不自然ではない。しかし、無助詞を用い、聞き手に「これ」を始めに認識させ、次に「何ですか?」と尋ねている。つまり、聞き手の意識や注意を「これ」に向かわせるために無助詞が用いられているのである。洋二3「娘さんφいるんだ」は、その前の「娘の誕生日」を受けて、洋二がまず「娘」の存在、姿を頭に描いたことを言い表している。ただし、「娘さんがいるんだ」でも問題は無い。これは意外性や驚きを表す「ガ」を用いても会話の内容に支障がないのとも関係

があるだろう。

(40) [洋二は高橋の脱走をかばったため、試験失格を言い渡された。]

洋二：出てってやるよ。こんなとこ出てってやるよ。高橋さん、行きましょう。娘さんゆ、待ってますよ。ほら。早く。 (オトナ)

(41) [婚約を解消した千春と有一が、婚約解消後初めて電話で話をする]

千春1：もしもし？

有一1：徳永です。

千春2：どうも。

有一2：郵便物ゆ、逆に届いたみたい。

千春3：そうみたいね。 (結婚)

(40) 洋二、(41) 有一2は、「娘さんが待ってますよ。」「郵便物が逆に届いたみたい」でも不自然ではない。しかし、無助詞を用いることで、聞き手にまず「娘さん」「郵便物」を頭に思い描かせ、次にそれがどのような状況であるかを伝えようとしている。そして、そうすることによって、単に現象や状況を伝えるのではなく「娘さん」「郵便物」に対する興味を引き出そうとしているのである。

以上をまとめると、無助詞の表現効果は、聞き手あるいは読み手に話題を思い描かせることで、興味や注意を話題に向けさせることであると言える。

9. 結果と考察

以下、本稿で得られた結果をまとめる。

ニュースの見出しは4つに分類でき、A)とB)は話題が提示されている。

- A) 特定の個人または団体が話題となっているもの
- B) 出来事または出来事の中心事物が話題となっているもの
- C) 読者の目を引くためのことばが文頭に來ているもの
- D) 全体が文または語句の羅列で話題が明示されていないもの

見出しの話題は、社会的周知度が高く、読み手の知識が一目で活性化されると判断された語彙でなければならない。

見出しの無助詞は、野田(1996)の「これまでに提案された5つの原理」に適用できないことから、無助詞独自の出現条件、機能、表現効果があると言える。

「ハ」が「聞き手にとって関心がありそうな名詞」に付くのに対し、無助詞は「書き手(話し手)が書きたい(話したい)と思っている新規の話題」に付く。

話しことばにおける無助詞の役割は新規話題の導入であり、この新規話題は聞き手の予想や期待に関係しない点が「ハ」とは異なっている。

無助詞を用いると、認識の順番を表現することができる。その表現効果は聞き手あるいは読み手に興味や注意を話題に向けさせることにつながっている。

10. おわりに

本稿は、無助詞文の出現条件と表現効果について論じるものである。これまでの無助詞の研究は話しことばにのみ目を向けられていたが、本稿は新たな研究手法として、ニュースの見出しを分析資料とし、そこで得られた結果を話しことばに適応させ、無助詞の出現条件、機能、表現効果の考察を行った。このような無助詞文の研究は、日本語教育における会話教育のみならず読解教育の発展にも寄与するだろう。今回は無助詞文に焦点をおいたため、主題全体が明示されていない場合や文頭以外に見られる無助詞、さらに複数の話題を同時に立てられるのかなどについては論じることができなかった。また、金水(2002)、小林(2004)が指摘しているように、古代語では無助詞が基本となっている。この古代語の影響が、現代語の無助詞にどのように関係しているのか、本稿ではそこまで分析を進めることができなかった。これらは今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 大谷博美(1995)「ハとガとゆーハもガも使えない文」『日本語類語表現文法(上)単文編』くろしお出版、P.287-P.295
- 2) 尾上圭介(1987)「主語に「は」も「が」も使えない文について」国語学会発表会発表要旨『国語学』150、P.48
- 3) 尾上圭介(1996)「主語にハもガも使えない文について」日本認知科学会第13回大会
<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe.html>
- 4) 甲斐ますみ(1991)「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』17、大阪外国語大学、P.113-P.127
- 5) 加藤重広(1997)「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27、P.19-P.82
- 6) 金水敏(2002)「歴史的に見た「格助詞」の機能」「無助詞、近世・近代、東西方言対立」2002年度日本言語学会夏期講座 配付資料
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/zyugyou/history/2002/ljsj2002.html>
- 7) 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 8) 佐治圭三(1984)「外国人にはどうしてハとガの違いがわからないのか」『国文学』29-6、学燈社、P.80-P.86
- 9) 新村出(1955)『広辞苑』岩波書店(第四版1991)
- 10) 筒井通雄(1984)「「ハ」の省略」『月刊言語』13-5、大修館書店、P.112-P.121
- 11) 野口崇子(2002)「「見出し」の“文法”一解説への手引きと諸問題一」『講座日本語教育』38、早稲田大学日本語研究教育センター、P.94-P.124
- 12) 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語・国文』58-10、中央図書出版、P.38-P.57
- 13) 野田尚史(1996)『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 14) 長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80、P.158-P.127
- 15) 藤原雅憲(1992)「助詞省略の語用論的分析」『日本語論究3 現代日本語の研究』和泉書店、P.129-P.148
- 16) 松下大(1928)『増補校訂 標準日本語口語法』紀元社(復刊本 勉誠社1974)
- 17) 丸山直子(1996)「助詞の脱落現象」『月刊言語』25-1、大修館書店、P.74-P.80
- 18) 三上章(1953)『現代語法序説 シンタクスの試み』刀江書院(復刊くろしお出版1972)
- 19) 水内純清(2001)「新聞の見出しに見る助詞の省略と効用」『東アジア日本語教育・日本文化研究』3、P.181-P.188

- 20) Lee, Duck-Young, 2002. The function of the zero particle with special reference to spoken Japanese. *Journal of Pragmatics* 34, 654-682
- 21) Lee, Kiri, 2002. Nominative case-maker deletion in spoken Japanese: an analysis from the perspective of information structure. *Journal of Pragmatics* 34, 683-709

例文採取資料

- (結婚) 「結婚シミュレーション」『世にも奇妙な物語映画の特別編』
ポニーキャニオン、2003
- (オトナ) 「オトナ受験」『世にも奇妙な物語 SMAP の特別編』
ビクターエンタテインメント、2002
- (会話コーパス) 「日本語会話データベースの構築と談話分析」文部省科学研究費補助特定領域研究
「人文学とコンピュータ」公募研、上村隆一、1997-1999、<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus>